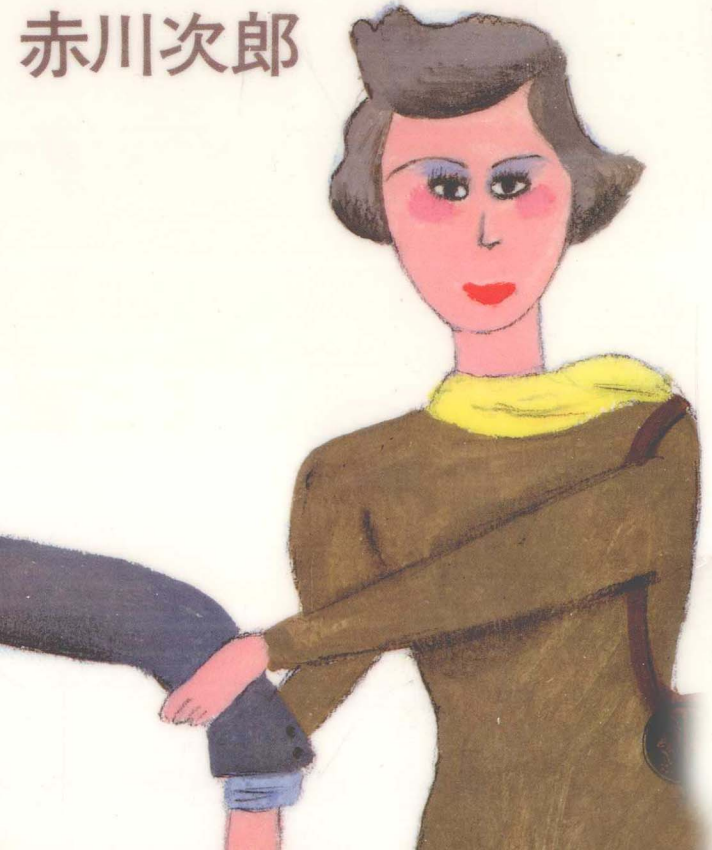
盗みは人のためならず

赤川次郎



徳間文庫

盗(ぬす)みは人(ひと)のためならず

© 1981 Jirô Akagawa Printed in Japan

105-3

1981年9月15日 初刷
1986年6月20日 36刷

著者 赤川次郎(あかがわじろう)
発行者 荒井修(あらいおさむ)
東京都港区新橋四―一〇 〒一〇五
発行所 株式会社徳間書店
電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替 東京四―四四三九二番
印刷 凸版印刷株式会社
製本 凸版印刷株式会社
〈編集担当 松岡妙子〉

0193-567227-5229 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

盗みは人のためならず

赤川次郎

徳間書店

目次

ヴィーナスの腰布 5
名画から出て来た女 45
C線上のアリア 82
人生に矛盾なし 118
贋作とドン・ファン 155
誘拐されて捨てられて 194
去る者を追え 233
残り者に服がある 272
あとがき 313
解説　辻　真先 314

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ヴィーナスの腰布

1

「皆さん！」
暗い会場に、案内をつとめる円沢館長の得意気な声が響いた。「これがヴィーナスです！」
闇の中に、白い光と共に彼女は浮かび上がった。
「おお……」
「これは……」
会場のあちこちから、期せずして声が上がった。しかしどの声も単なる感嘆詞にとどまって、後はただため息が続くばかり……。
彼女は高さ一メートル余りの大理石で、その大きさではかのミロのヴィーナスに遙かに及ばなかったが、魅惑的なことにかけては決してひけをとらない。特に、ミロのヴィーナスと違って、こちらは完全な形で発見されたのだった。その顔立ちはミロの美しい姉妹と酷似していて、同時代の物であることを窺わせる。
彼女は今まさに沐浴から上がろうとするように、布で前を隠して、その布が足にまつわりついて

いた。豊かな乳房の膨みは本当に触れれば血が通っているのではないかと思われるほどになまめかしい。肉付きのいい腰の線、布からわずかに覗いた太モモの丸味……。

観客たちはやっと陶酔からさめて、

「いや、みごとですな！」

「典型的なヘレニズムの……」

「視線がまるで遠い未来を見通しているようですな」

「本当に素敵ですわね」

と口々に感想を述べあう。そのうち誰かが、

「部屋は暗いままにしておくんですか？」

と訊いた。円沢館長は、

「こうしてヴィーナスだけに照明を当てておいて、神秘的な雰囲気の中で、何千年の歴史に思いを馳せていただければ、というのが狙いなのです」

「少し台の位置が高過ぎませんか？　もう少し低くてもいいと思うが」

と今度は別の声。

「いつもこの程度の混み方ならよろしいのですが、明日からの一般公開には相当の混雑が予想されますので……」

「最近発見されたのですから、その経緯を説明してあったほうが親切ではないですかね」

「はい。説明のパネルを今作製中でございまして。今夜中にこの部屋の入口わきに掲示します。それに発見時の写真、新聞記事などもパネルにして並べるつもりでおります」

そこへまた他の声が続いた。

「いくら払ったらその腰の布を外してくれるんだい？」
――しばし、ポカンとした沈黙が広がった。
「……な、な、なんということを！」
円沢館長の声は震えていた。「だ、誰だ！　そんな……けしからんことを！」
一同がザワついた。
「悪趣味な冗談だ！」
「美への冒瀆だ！」
「何ていやらしい！」
だが、言った当人はとっくにその部屋を出て、美術館の中を正面玄関へ向かって歩いていた。
「へっ！　あんな女、ちっとも面白くねえ。出し惜しみしやがって！」
年齢は三十四、五といった所。中肉中背、取り立てて目立つ所もないが、茶のツイードに包んだ身体の動きはキビキビと無駄がなく、年齢よりも若々しい印象を与える。ツイードの下はスポーツシャツと、一見自由業風であるが、髪はキチンと短く切って、丁寧にクシが入れられている。ややの皮肉めいた笑みを唇の端に含んで、なかなかの好男子である。
途中の展示には目もくれず、その男は美術館を出た。そして玄関から降りる階段の所でふと足をとめた。
階段の下で、美術館の守衛が二人がかりで一人の男ともみ合っている。
「ともかく館長に会わせろ！」
男は見るからに不遇の芸術家風で――つまりは浮浪者よりはややましといったなりで――長髪、顔の下半分を包むヒゲ、もう四十代だろうが、体つきは割合にがっしりとして見える。

「貴様らなんかじゃ分からん！」
と〈芸術家〉は喚いていた。「館長を呼べ！」
「館長はお忙しいんだ。さあ、帰って！」
守衛は男を表通りのほうへ押し戻そうとする。
「触るな、畜生！　あれを返せ！　あれは俺のものなんだ！」
「さっさと帰らないと警察を呼ぶよ」
と守衛が脅す。
「呼んでみろ！　困るのは奴のほうだ！――いいか、じゃ教えてやる。あのヴィーナスは俺がこの手で彫り上げたんだ！」
「何を馬鹿なこと言ってるんだ」
「本当だぞ！　信じないのか！」
「ああ、分かった、分かった。さあ、早く帰って頭を冷やせ」
「信用しないんだな！　それなら――」
「おい、いい加減にしろ！」
守衛がぐっと凄んで、「本当に留置場へ放り込まれたいのか！」
さしもの芸術家もここで権力に屈し、ついに沈黙を余儀なくされた――というと格好がいいが、要するに渋々退散することになったのである。
階段をゆっくりと降りて来た茶のツイードの男は、腹立ち紛れにそこいら中の小石を蹴っ飛ばしながら歩いて行く〈芸術家〉の後ろ姿を見送っていた。

多摩川の土手もほど近い住宅地。比較的近年に開発されたせいか、まだ真新しい家が多い。超一流の高級住宅地というわけではないにしても、一応、マッチ箱のような建売住宅は見当らず、庭に芝生の広がる二階建の家が、思い思いのモダンな外観で立ち並んでいる。

茶のツイードの男は、暮色の迫る道を歩いていた。道を狭い私道へ折れると、素早く背後へ目を配った。そして、片側の、二メートルほどの高さのコンクリート塀をチラリと見上げると……一瞬の後には彼の姿は塀の上にあった。そして音もなく中の庭へと降り立つ。フワリと身軽なその着地は、まるで猫のそれを思わせて、柔らかい芝生に跡も残さないほどだった。

庭は昏く、芝生の向うには、白い椅子とテーブルの置かれたテラス。そしてガラス戸には室内の光が淡いブルーのカーテンを透して明るく映えている。

男は小走りに芝生を横切ると、ガラス戸を静かに開けて、カーテンの端からスルリと室内へ滑り込んだ。

広々としたリビング・ルームのソファで雑誌をめくっていた女が顔を上げて、

「あら、お帰りなさい」

「ああ」

男は後ろ手にガラス戸を閉めて、鍵をかけた。

「不用心だな、鍵ぐらいかけとけ」

「だって、どうせそこから来ると思って。……でもねえ、あなた、自分の家ぐらい玄関から入ってらっしゃいよ」

「どうも玄関からじゃ家へ入った気がしねえんだよ」

彼はニヤリとして、女の横に座った。――女は二十七、八といった年齢であろう。髪を長く肩へ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

垂らして、飾り気のない装いだが、ちょっといたずら好きな少女といった印象の残る、可愛い女である。白いトックリのセーターにタータンチェックのロングスカートといういでたち。部屋の明るい色調によくマッチしている。

「お腹空いてる？」

「ぺこぺこだ」

「そう、じゃ今仕度するわ」

「その前に……」

「何よ？」

女は雑誌を置いて振り向いた。

「服を脱げよ」

「いやあよ！　こんな時間に！」

「いや、別にそういうわけじゃないんだ」

「それじゃどうしようってのよ？」

「ちょっと見たくなってね」

「あ、そう」

女はソファから立ち上がると、手早く服を脱ぎ捨てて、「これでいいの？」

「うん。そのスカートをちょっと持ってみてくれ。そこへ当てて……そう、足に絡ませてみてくれ」

「何やらせるのよ、一体？」

彼はじっと眺めて、

「……やっぱり、お前のほうがずっと色っぽい」
「まあ、何よ！」
女はプッとむくれて、「ストリップでも見て来たのね、馬鹿にしてる！」
「いや、美術館でヴィーナスを見て来たのさ。――やっぱり布を外せないと面白くもないや」
「呆れた、そんなことのために私を裸にしたの？」
「もういいぜ、飯にしてくれ」
「冗談じゃないわよ。ここまで来たら、ちゃんとケリをつけてもらいますからね！」
女は男へ飛びかかって行った……。

「気でも違ったの？」
真弓がサラダにドレッシングをかけながら、驚いて淳一の顔を見た。
「別に違っちゃいねえぜ。おい、テーブルにドレッシングかけるのが流行なのか？」
「キャーッ！」
ひとしきり大騒ぎ……。
「あなたが変なこと言うからよ」
「どうしてだ？」
「そんな物盗むなんて気狂い沙汰よ！」
「誰が盗むって言った？」
「だって今……」
「爆弾を仕掛けるんだ」

「もっと悪いわ！」
「なに、ちょっと捜しても分からねえ所へ仕掛けておいて、金を払えばその場所を教えてやる、と言ってやるのさ」
「向うがただのいたずらだと思って相手にしなかったら？」
「もう一つを二、三時間早目に爆発するようにセットしておくんだ。そいつがはじけりゃ向うも本気にする」
「人をけがさせたら……」
「それは大丈夫。俺を信用しろよ」
「それならいいけど……」
「腹が減った！　もう一杯！」
「呆れた、お代り、五杯目よ」
「今まで食ったのは、さっき消耗した分だ」
「今度のは？」
「今夜の分だ」
「いやらしい！」
「誤解すんなよ。仕事のことだぜ」
「今夜やるの？」
「ああ、善は急げだ」
その時、リビング・ルームで電話の鳴るのが聞こえた。真弓が立って行く。
「はい今野です。――ああ、道田君？　どうしたの？――ええ？――分かった。仕度しておくわ」

「……何だ、そっちも仕事か？」
「そのようよ」
「じゃ、後片付けはしておいてやるよ。俺の出勤はまだ大分後だからな」
「悪いわね」
真弓は食べかけていた若鳥の丸焼にガブリとかみついた。
「何事だ、一体？」
淳一がさして興味もなさそうに訊く。
「……ん？……ムグ……こ……殺しだって」
「大変だな、刑事稼業も」
真弓は食堂から寝室へ姿を消すと、五分とたたないうちに戻って来た。スポーティなサファリジャケットとスラックス。ジャケットの下のショルダーホルスターから拳銃を出して、弾丸の入っていることを確かめるとホルスターへ戻す。パトカーのサイレンが近付いて来たと思うと、玄関先で停った。
「お迎えらしいぜ」
「行って来るわね」
「玄関まで行こう」
玄関を出ると、パトカーの前にレインコート姿の青年が立っていた。
「やあ、晩ご飯だったんじゃないですか」
「仕事ですもの、しようがないわよ」
道田刑事はまだ二十四歳の若さ。人の好いハリキリボーイという印象である。真弓の後から淳一

がサンダルを引っかけて出て来ると、
「やあ、ご苦労だな」
と道田へ声をかけた。
「今晩は！　いつも真弓さんを引っ張り出してすみませんね」
「全くだ。俺たちが離婚するはめになったら、慰謝料を警視庁から払ってもらうぜ」
「何言ってんのよ」
と真弓が笑って、「じゃ行ってくるわね」
と淳一の唇へ唇を合わせて……。道田はヒョイと背を向けて頭をかいた。
パトカーがサイレンを鳴らしながら走り出すと、真弓はビジネスライクな口調になって、
「被害者は？」
「はあ、光学機器メーカーの技術者だそうです。〈光学〉って光のほうで、つまり……電球か何か作ってんじゃないですか？」
「道田君！……光学機器ってのはね、カメラとか望遠鏡のことをいうのよ」
「ははあ、そうですか。……カメラって光りますか？　そうか、フラッシュとかストロボがありますものね。それで〈光学〉か……」
真弓は黙って肩をすくめた。
「話は違いますけど」
道田がニヤリとして、「真弓さんのご主人って格好いいですね、お会いする度にそう思うなあ」
「ありがと」
「何やってらっしゃるんですか？　いつもお宅におられるみたいですね」

「そうよ。夜の商売なの」
「というと……」
「大泥棒なのよ」
道田はゲラゲラ笑い出した。
「なるほど！　格好いいわけだなあ」
真弓は苦笑いして外を見た。――春。穏やかな夜は恋人たちにふさわしい、甘い風を送っているようだった。

2

真弓の乗ったパトカーが、小平市の外れに広々と広がる「M光学KK・技術研究所」の正門に着いたのは八時を少し回っていた。制服の警官が、門の傍にある受付の小さな建物から走り寄って来る。
「このまま真直ぐ行って、あの正面の白い建物です」
パトカーは門を入って、芝生や噴水のある広い前庭を抜けて行った。夜なのではっきりとは見られないが、色とりどりの花壇も造られているようだ。
「広くて立派ですねえ」
道田が感心して首を振った。
「こういう環境でこそいい発明ができるのよ」
と真弓が分かったような顔で言う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong